AACK 京都大学学士山岳会 No.67

Newsletter

December 2013

http://www.aack.or.jp

目次

ラダックの旅（ツオー・モリリとヌブラ谷）……阪本公一……1
高所肺水腫・脳浮腫の恐ろしさ……阪本公一……8
チリ・スキー旅……安仁屋政武……11
ツェラムよりダーランへ帰りのキャラバン ―高木真一と歩いた一五日間の旅―……斎藤惇生……15
第二五回雲南懇話会（二〇一三年六月二二日開催）に於ける講演概要等……前田栄三、安仁屋政武……17
AACKニュース……18
会員動向……19
訂正……20
編集後記……20

ラダックの旅（ツオー・モリリとヌブラ谷）

阪本公一

二〇〇七年から毎年のようにインド・ヒマラヤのザンスカールへ未踏峰の探査に出かけてきたが、今年二〇一三年はインド・ヒマラヤのラダックへのんびりとした山旅を楽しもうと、ツオー・モリリとヌブラ谷を訪れる計画を立てた。

未踏峰探査の仲間の谷口朗さん、福本昌弘さん、八太幸行さん、宮川清明さんの他に、インド・ヒマラヤへ初見参の村上正康さん、上条雄吉さん、宮川ふみ江さん、小林悦子さん、谷川佳子さんの五名の参加があり、合計一〇名のパーティとなった。

ツオー・モリリは、ラダックの南部にあり、チャンタン高原の西端に位置する湖で、大きさは琵琶湖の約五分の一弱、周囲は六〇〇〇mの山々に囲まれた風光明媚な標高約四五〇〇mの高原地帯にある。

ヌブラ谷は、ラダックの中心地レーの北にあり、東カラコルムの名峰サセルカンリの南西に位置する谷で、インダス河の支流であるシャイオク川に合流する。古くは、カラコルム峠を越えてレーに入る中継街道であり、現在もチベット仏教の寺院が数多く残されている。

今回は、ラダックのレーを起点に、ツオー・モリリとヌブラ谷を訪れる二週間の旅である。関空発着組五名、羽田発着組五名の二グループに別れ、六月二六日～七月九日の予定で出かけた。六月二六日に Air China で日本を出発し、北京で合流後同じフライトでデリーに六月二七日の早朝に到着した。関空・デリー往復航空運賃が八四三〇〇円（空港税・燃料費込み）と他の航空会社に較べて非常に安い航空運賃にひかれて Air China を使うことにしたが、北京・デリー間のフライトが往路二時間半、復路三時間五〇分も遅れる始末。

更に機内トイレが排水フラッシュの作動不能や電気がつかなくて使用不能だった機体も何度かあり、その上機内食がもの凄くまずくて、全隊員が大不満だった。

デリーから国内便でラダックの中心の町レーに、二七日七時過ぎに到着。Hidden Himalaya の社長のツワン氏の出迎えを受け、車三台でレーの Hotel Lingzi に投宿。Hotel Lingzi はこじんまりとしたホテル

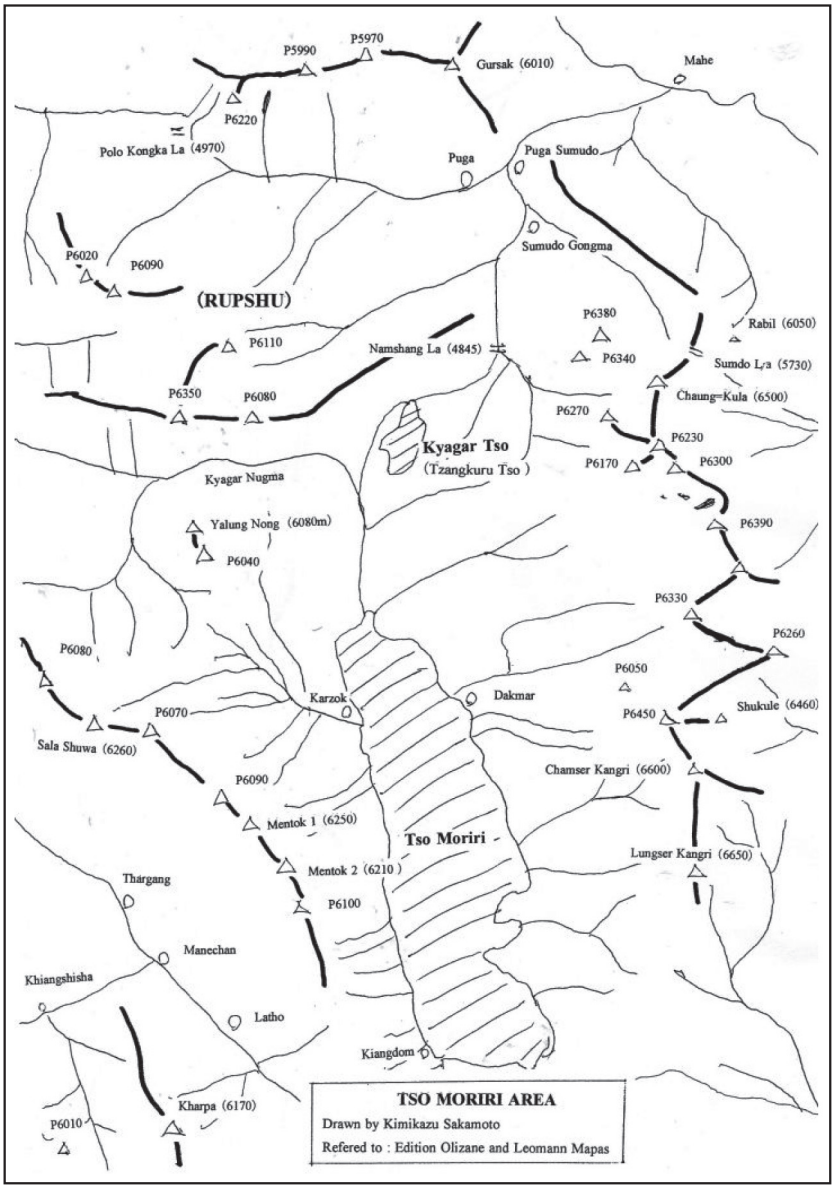
だが、清潔で気持ちが良い。

レーの街は標高三五〇〇ｍの高地にあるので、午前中は、ホテルにて静かに休息し、午後にレーの町にある旧王宮、チョモ・ゴンパとシャンテイ・ストウパーを見学に行ったが、高度障害で気分が悪くなる者が二名でたので、阪本が付き添って先にホテルに戻った。

二八日は、三台の車で、チベット・ゴンパ（寺院）巡り。ラダックで最大で且つ最も有名なヘミス・ゴンパにまず参拝。岩山に取り囲まれたヘミス・ゴンパの手前のヘミス村には、ピンクの野生のバラが咲きほこっていた。昨年六月末に同寺を訪れた時は、ヘミス・ゴンパのお祭りの日で、多くの地元の人々や観光客で賑わっていたが、今年は静かな雰囲気の中で、ヘミス・ゴンパを拝観する事が出来た。

ヘミス・ゴンパの後、Igu の奥にある Igu Kehspan Meditation Center と呼ばれる標高約四三〇〇ｍの盆地にあるチベット密教カギュウ派の瞑想所を訪問した。二〇〇七年に訪れた時にお会いした Dorje Namgal さんと言う老ラマ（現在八七歳）は今も健在で、六年前に撮した四つ切りの写真をお持ちしたら大変喜んで戴き、ビスケットとお茶で大歓迎をしてくださった。私達がホテルから持参したサンドイッチの昼食を、老ラマと一緒に楽しく味わった。日本からきた美女三人に囲まれて、老ラマは大変御機嫌であった。

ホテルへの帰路、ゲルクパ派のゴンパで、ラダックを代表する勇壮なテイクセ・ゴンパに参拝した。同寺のチャンバ大仏像や、数多くあるタラ（女性の仏さん）像が圧巻である。



ツオー・モリリ周辺概念図

ラダックのホテルで買うミネラル・ウォーターは一リッター・ボトルが、四〇～四五ルピー（約八〇～九〇円）もする。私達は、Hidden Himalaya の事務所の近くにあるフィルター・ウォーター（そのまま飲用可能）の販売所で購入することにしている。一リッターがたったの七ルピー（約一四円）で買えるので、私達貧乏遠征隊は、何時も三リッター乃至は五リッターのポリ・タンクを何個か持参して飲料水を購入している。

ラダックは、今年は欧州人の観光客が少なくて、インド人が急増したように見受けられた。ツワン氏によれば、インド経済が好調でインド人の一般所得が上がってきていることがインド人観光客の増加につながっていると

観察していた。且つ、欧州の経済状況が悪いことと、デリー／レー間の航空運賃が暴騰した事が欧州からの観光客の激減の原因になっている模様とのこと。ちなみに、私達は、二〇一二年一二月にHidden Himalayaを通じて、デリー／レー間の往復航空券をＵＳ$三三〇で購入したが、六月末現在では片道がＵＳ$三〇〇以上の高値で売られている由。欧州各地からデリーへの往復航空運賃に較べて、僅か一時間のフライトであるデリー／レー間の往復航空運賃がべらぼうに高いので、欧州人はラダックへの観光に二の足を踏んでいるのかも知れない。

いよいよ、ツオー・モリリに出かける日だ。六月二九日朝七時三〇分にレーのホテルを出発。インダス河の上流の南の方へと、三台の車で向かう。昨日通ったIguの少し先に、Upshiと言う割と大きな町がある。インダス河を離れてマナリへ向かう国道との分岐点の町である。このあたりは、ガンジス河沿いの道路の拡張工事に、労働者が数多く働いていた。中国がパンゴン湖の中国側に立派な舗装道路を数年前に建設したので、それに対抗する為に、IBRO（Indian Border Road Organization）がインダス河の奥に通じる道路の突貫工事をやっているのだそうだ。中印国境紛争の影響は、大変大きい。

Upshiを過ぎるとインダス河は、Kiariまで両岸に大障壁が続く大峡谷となる。一二時にChamlangと言う大きな街に着き、道路脇の食堂で昼食。この近辺には、Indian Tibet Border Police（ITBP）と言うインド・チベット国境警備警察隊の大きな駐屯地がある。ラダックは、中国及びパキスタンとの国境問題係争中の地域であり、北西のカルギルから、レー及びインダス河沿いの源流にかけて、インド軍や国境警察隊の駐屯所が非常に多い。駐屯兵の数は公表されていないが、ツワン氏の話では一〇万人をくだらないだろうとのこと。

一三時一五分にツオー・モリリへ向かう分岐点のMaheに到着。まっすぐ南に向かうインダス河沿いの路は、外国人には立入禁止となっている。Maheにチェック・ポストがあり、ILP（Inner Line Permit）とパスポートを提示し、通行登録をして、右手の鉄橋を渡ってツオー・モリリに向かった。

インダス河を離れると、谷は幅の広い穏やかな谷となり、谷筋に白やピンクのタマリスクの花が満開に咲いていた。Puga Sumdoから西へ行くと、すぐ温泉のあるPuga村があるが、私達は立ち寄らなかった。その奥にPolo Kongka峠（四九七〇）があり、峠の北面にPolokongka（六六三二）や沖允人さん達が初登頂されたThugje（六一四八）が連なる。ツオー・モリリへ向かう路はつづら折れの立派な舗装道路となり、四八四〇ｍの峠に達する（一四時一五分着）。峠の名前は、Edition Olizane地図にはNusgar Laと記載されているが、Leomann MapsではNamshang Laとなっている。我々のガイドのツワン氏がKarzokの村人から、地元ではNamshang Laを使っていると聞かされていたので、私達もNamshang Laという地名を使用することにした。高所順応のため峠に約三〇分滞在した後、峠を下り、広大な高原にあるちいさな湖に達する。この湖はEdition Olizane地図ではKyagar Tso又はThadsang Karu、Leomann MapsではTazang Tso又はKaigar Tsoとなっている。私達はKyagar Tsoと呼ぶことにした。

Kyagar Tsoには、放牧の人々のテントが点在する。Kyagar Tsoの西には、Chalung又はKulaと呼ばれる六五〇〇ｍ峰、P6270やP6170の三山がゆったりとした山容を見せている。Kulaは一九九七年に日本山岳会東海支部に初登頂された山だ。

Kyagar Tsoの南には、ツオー・モリリの西側にあるMentok連峰が遠望された。Edition Olizane Mapでは、北にあるのがMentok 2峰（六二一〇）、南に位置するのがMentok 1峰（六二一五〇）とあるが、Leoman Mapsでは逆に北の山がMentok 1峰（六二一七七）で南がMentok 2峰（六一一七二）となっている。帰国後、一九七四年よりラダックに通っておられる先達の沖允人さんにお教えいただいたところ、正しくは北にある山が、山形大学が初登頂したMentok 1峰（六二一五〇）で、Mentok 2峰（六二一一〇）は南の山だとのこと。

ラダックやザンスカールに関する市販の地図がいろいろ発行されているが、地図により地名も異なり、山の位置、標高もまちまちで、本当に混乱させられる。基準となるインド国

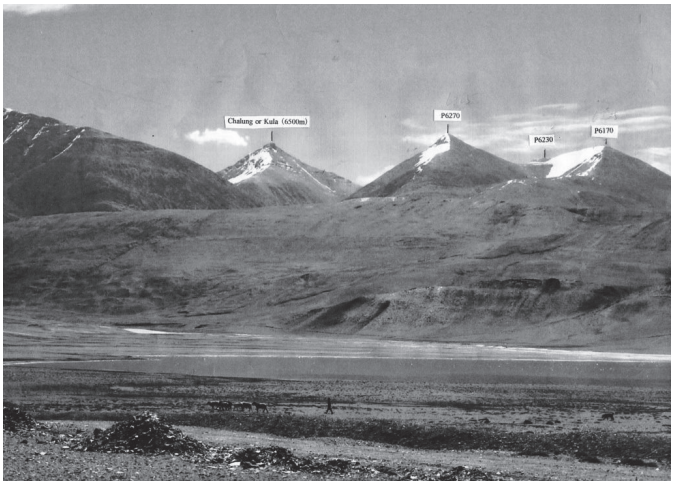
防省のSurvey of Indiaの地図が市販されて一般大衆も使用可能になれば良いのだが、そんな時期は何時になったらやってくるのだろうか？

高原にあるKyagar Tsoから西の方へ一段下りるとkyagar川の広い河原があらわれ、ヤクやパシミア・ゴートを放牧している遊牧民のテント村が出来ている。パシミアはカシミアよりも繊維が細く高級だと言われており、パシミア・ゴートはツオー・モリリから西のツオー・カル（塩の湖）に至たる四〇〇〇m～五〇〇〇mの高原で放牧されており、パシミアのショールやセーターはラダックの一大産品となっている。

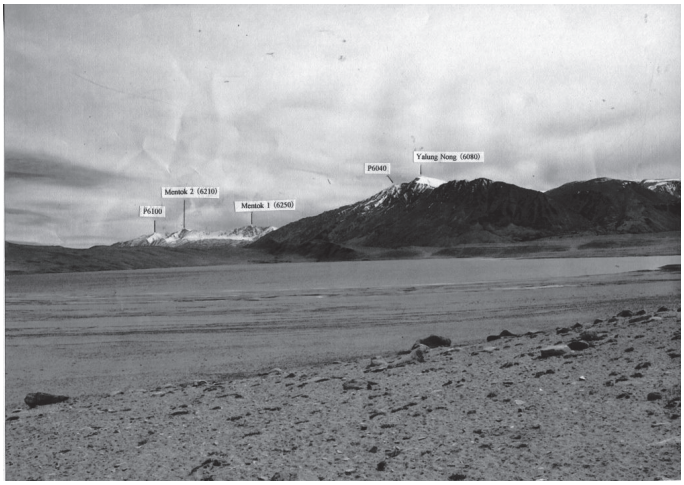
Kyagar川が西に直角に曲がる北面のKyagar川左岸にはP6350、P6080、P6110のたおやかな山があり、右岸にはYalung Nong（六〇八〇）とP6040がある。Kyagrar川は、南に流れツオー・モリリに流れ込む。ツオー・モリリには、渡り鳥が数多く生息しており、鳥たちの保護のために人間が入れないようにツオー・モリリ沿いに金網のフェンスが張られている。

ツオー・モリリの西面にはインドHimalayan ClubのHarish Kapadiaさんが一九九五年に初登頂されたChamser Kangri（六六〇〇）とLunger Kangri（六六五〇）がどっしりと腰をすえている。ツオー・モリリ山塊の最高峰だが、割と簡単に登れる山なので、最近はエージェントやガイドが企画する公募登山隊に毎年のように登られている。

Mentok連峰の麓にあるKarzokは、ツオー・モリリの西岸の標高約四五〇〇mにあり、常設民家もあるこの近辺で最大の村。私達はKarzokのテント・ホテルに泊まったが、ツイン・ベッドが備え付けてある二人用の大きなテントで、各テントに水洗のトイレやシャ



Kyagar Tsoより東側の山々を望む（八太）



Kyogar Tsoから遠望するツオー・モリリ西側の山々（八太）

左 Chamser Kangri（6600m）、右 Lungser Kangri（6650m）
谷口撮影

ワーも完備されていて大変快適であった。

隊員の一人が、その夜嘔吐を繰り返し、ほとんど睡眠がとれなく疲労困憊。翌朝の起床時の脈拍が一二〇、体温三六・八℃、SpO_2が五五％と計測された。完全な高度障害と思われ、放置しておくと高所肺水腫を惹起する恐れもあるので、ツオー・モリリでの二泊の宿泊を取りやめ、急遽その日の中にレーまで戻ることに決断した。その他の隊員が朝食を済ませた後、午前八時にKarzokを直ちに車でレーに向けて出発。Upshiまで一気に走り、午後二時にUpshiで昼食をとった。Karzokでは、すっかり弱っていた隊員も、おいしそうに昼食を口にし、他の隊員も一安心。高度約四五〇〇mのKarzokから、標高約三三〇〇mのUpshiまで降りてくると高度障害は不思議なように消えてなくなった。高山病になったら直ちに五〇〇m以上の高度を下げろという鉄則を、あらためて再認識する実体験を持つことができた。午後四時半頃に、レーのHotel Lingziに帰着。夕食は、ホテルの外のレストランで中華料理を食べたが、今朝は高山病で全く元気のなかった隊員も、人並み以上に夕食を楽しんでいた。

翌七月一日は、休養日とし、自由行動とした。ガイドのツワン氏に同行願い、念のためツオー・モリリで高山病にかかった隊員をつれて、朝一〇時にレーのSNM Hospitalへ出かけた。診察を待つ長い列が出来ていたが、ツワン氏の交渉のお陰で、一〇分ぐらいの待ち時間で内科の女医さんに診察していただいた。状況を説明し、今朝のSpO_2は八二％なることを説明した。明日から標高五六〇〇mのKhardung Laを越えて、ヌブラ谷に行く予定だが、問題はないかと質問したところ、峠に長時間滞在しないなら、ヌブラ谷は標高が三〇〇〇～三一〇〇mだから、明朝のSpO_2が大幅に低くなければ、ヌブラ谷へ行くことは全く問題ないとの回答をいただいた。

本人もツワン氏も私も、女医さんの言葉を聞き、ホッとする。診察料をツワン氏が立て替えてくれたので、幾らだったか聞いたところ、二ルピー（約四円）とのこと。驚くべき安さだ。ツワン氏によると、インド政府はラダックの住民に対して、特別な医療優遇政策をとっていて、ラダックの病院で治療を受ける外国人もラダック住民並の安い診療代で良いことになっている由。

明日から予定通りにヌブラ谷に行けることになり、本人も他の隊員も全員大喜び。ツワン氏も、ヌブラ谷での宿泊予約を取り消さなくてすみ、一安心。他の隊員は、買い物を兼ねて、レーの街の探索に一日を楽しんだようだ。

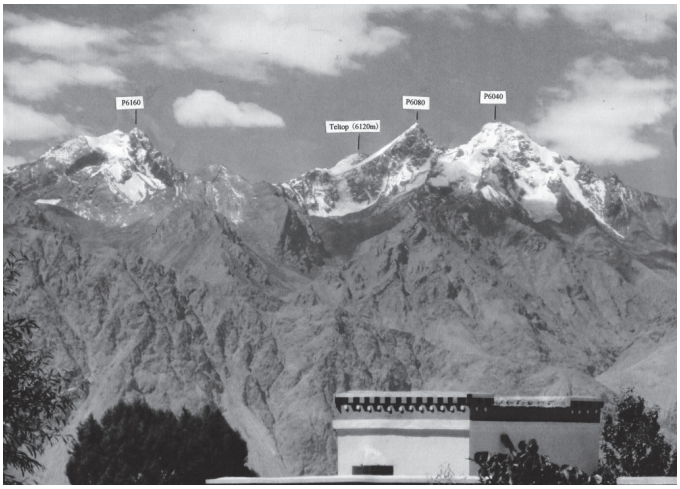
七月二日、朝七時半にレーを三台の車で出発。世界一高い車の通る五六〇〇mの峠と言われているKhardung Laの手前のSouth Puluのチェック・ポストにて、ILPとパスポートを提出し通行登録を行う。つづらおりジグザグの山道から、レーの街の西に連なるStock Kangri連山を眺め、写真を撮った。Stock Kangri（六一五〇）は、トレッキング・ピークになっていて、レーのIMF（Indian Mountaineering Foundation）事務所へ申請すれば二二五〇ルピー（約四五〇〇円）で翌日には許可がとれるので、大変人気がある。条件の良いときは、ピッケル・アイゼンなしでも登れる山なので大勢の登山者で毎年賑わっているが、BCはゴミの山になりつつあるとHimalayan Clubでも対応に頭を痛めているそうだ。

Khardung Laで高度を計測したら、私達の持参している高度計では約五二〇〇mしかなかった。過大宣伝だと憤慨する隊員もいた。ツオー・モリリで高山病になった隊員がいるので、Kharudung Laでは車を止めて休息せずに、一気に峠を下った。

途中Khardung村のレストランで昼食をとり、Deskitを通り越してHundarのテント・ホテルに一四時に到着。Hundrのテント・ホテルも、カーペットが敷いてある二人用のツイン・ベッドの個室で、水洗トイレとバス付きの清潔で快適なホテルだった。緑の林の中のテント・ホテルは、落ち着いた雰囲気でくつろげた。

ヌブラ谷とシャイオク川の出合い近辺は、幅二㎞以上もありそうなデルタとなっている。DeskitやHundarは、パキスタンとの国境に近いので、軍隊の駐屯所を何カ所にも見受けられた。

七月三日は、Hundar村にある岩山の上のDeschen Tsemo Gompaへ参拝。Gompaから



ヌブラ谷の Sumur 村より眺める Dekit の南の山々

見下ろす木々の緑につつまれた Hundar の村が美しい。その後、Hundar の砂漠へキャメル・サファリを楽しみに行った。乗車券は一五分で、一人一八〇ルピー（三六〇円）であった。シャイオク川沿いにある Hundar は、両岸の岩壁がもろく、崩壊して砂状になって風で吹き飛び、シャイオク川に堆積して鳥取の砂丘のようになっている箇所がある。此所に、ラクダを利用して、観光客を乗せて遊ばすキャメル・サファリがヌブラ谷の名物になっている。

午後は、Deskit Gompa を訪問。Gompa は山の中腹にあるが、車で行ける。Gompa の裏側には P6040 の魅力的な山が聳えている。大仏の場所から眺める Deskit Gompa と後ろの P6040 の景観は、なかなかの圧巻であった。その日も、同じテント・ホテルの Sand Dune Leisure Camp に宿泊した。夜、周りをうろつく野犬の群れが吠え続け、一晩中やかましくて眠れなかった。

七月四日は、Sumur へ移動。いったんシャイオク川を南に行ってから、橋を渡って対岸の左岸の道にでる。Deskit 村の近くから、対岸の Tirit 谷の奥に聳える真っ白な鋭峰が望まれた。多分、Abule（六三六〇）であろう。Sumur 村にある、Samtaling Monastry と言う最近建てられた Gompa に参拝。Gompa の前庭から、Deskit Gompa の南に聳える P6040 や Teltop（六一二〇）の連山が手に取るように眺められ、写真を撮影した。

今日の宿泊先は、Sumur の新しいテント・ホテルである Valley Flowers。花壇のある明るいテント・ホテルで、バス・ルームはタイル張りであった。

午後、Panamik の温泉を見物。露天の温泉に観光客が捨てるゴミに困った地元住民が、男女別の浴槽のある建物を最近建設して運営している。外人に与えられる ILP は、Panamik までそれ以上北には行けないことになっているが、Panamiki を少し越えた箇所から対岸に渡った山の上にある Ensa Gompa には参拝が可能。車で対岸に渡り、中腹の車止めから、急坂で砂混じりの狭い滑り落ちそうな山道を登って Ensa Gompa に参拝した。地元の人たちが、宿坊の建設に男女総出で忙しく働いていた。ラダックに住むチベット仏教の人々の、「相互依存」の生活を目の当たりに見せて貰った。

Khardunga La より遠望する Saser Kangri 2 峰（八太）

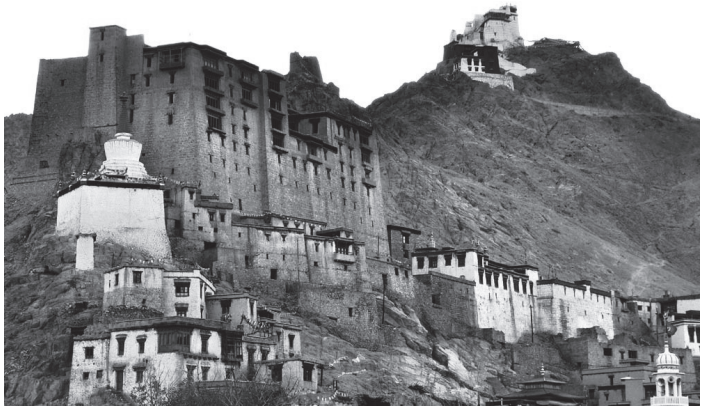
七月五日にはヌブラ谷を離れ、レーに戻った。Khardung La から、Saser Kangri 連峰を眺めるため標高差約五〇ｍの小山の上に登った。最初は雲で見えなかったが、一〇分ほど休憩している間に、Saser Kangri 2 峰の秀峰が望まれた。Saser Kangri 2 西峰（七五〇〇）は、一九八五年に日印合同隊（日本隊隊長沖允人氏）が初登頂している。Saser Kangri 2 東峰（七五一八）は、二〇一一年に米印合同

隊が初登頂。

午後一時半にレーに戻り、午後はそれぞれの土産物の買い出しや洗濯などでのんびり過ごした。

七月六日は、車でゲルク派の総本山であるリキール・ゴンパを参拝。このゴンパの現在の座主はダライラマ一四世の実弟のンガリ・リンポチェ。寺院の手入れは完璧であり、大変清潔で、若い僧侶を教育する学校もある。本堂の横にチャンバ大仏がそびえている。

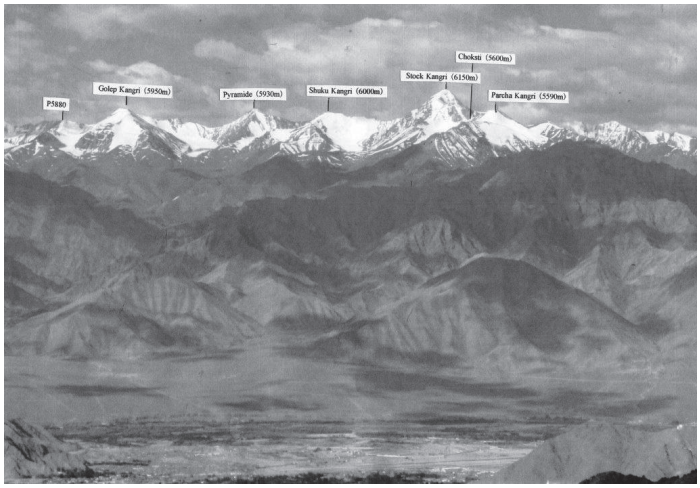
その後、世界的に壁画で有名なアルチ・ゴンパを訪問した。カシミール調の壁画で有名で、数多くの写真集などで紹介されている。七年前は、フラッシュを使用しなければ撮影が可能だったが、現在は堂内での撮影はすべて厳禁になっている。



Leh の旧王宮とツオモ・ゴンパ

七月七日の早朝にレーからデリーに飛び、午後はインド門と国立博物館を見学。翌八日も市内観光とＩＭＦ（Indian Mountaineering Foundation）の訪問に時間を使い、七月九日早朝のデリー発のフライトで北京経由で日本に帰国した。

僅か二週間のバタバタした旅程だったが、それなりに充実した楽しい旅であった。



Leh の町と Stock Kangri 山群

「追記」

今回も Hidden Himalaya の社長ツワン氏と奥様の紗智さんには、大変お世話になった。ツワン氏は、二〇〇七年からのお付き合いで、デリー大学の大学院卒の経歴を持つ、ザンスカール出身の誠実で信頼出来るガイドである。紗智さんは滋賀県比良山の麓出身の女性で、ツワン氏の人柄に惚れて結婚。元西遊旅行社員の経験を生かして、夫婦二人で旅行代理店をレーで経営している。長男創一君（三歳）、次男秋生君（一歳）との四人家族。

ラダックに行かれる方で、現地で起用するエージェントが特になければ、是非 Hidden Himalaya を活用されるよう強くお奨めしたい。

Hidden Himalaya

21 Hemis Complex, Zangsti, Upper Tukucha Road
Leh, Ladakh, 194101, Jammu & Kashmir, India
Tel: 91-1982-257994
E-mail: Zurhang@rediffmail.com
(Mr. Tsewang Yangphel)
E-mail: sachitsewang@gmail.com
(Mrs. Jyoko Sachi) 日本語受信可能

＊ Hidden Himalaya ホームページ：
http://www.hiddenhimalaya.com（英語）
http://zanskar.jimdo.com/（日本語）

＊紗智さんのブログ「ラダック生活記」：
http://zanskar555.blog117.fc2.com/（日本語）

高所肺水腫・脳浮腫の恐ろしさ

阪本公一

長野に住んでいる社会人山岳会の友人F氏が、二〇一三年三～四月にネパールのクンブー山域にあるロブチェ・ウェスト（六一四五m）に登りに出かけた。一九四〇年生まれの私と同い年の彼が隊長で、彼より数歳若い二人の仲間との三人パーティの遠征隊であった。彼はアピ南西壁やランタンリにも遠征している優秀なクライマーで、歳をとってからも殆ど毎年のようにネパールに出かけているヒマラヤ狂いの岳人である。

彼等は見事にロブチェ・ウェストを登頂した。しかし、帰路に隊員の一名が高山病になり、カトマンズの病院に入院。高所肺水腫との医師の診断であった。かなり悪化しており胸部の切開手術が必要と判断され、カトマンズの病院で急遽手術をする事になった。四月中旬に手術をしたが、その後の経過が思わしくなく、連日の酸素吸入で治療を続けている状態であった。本人及び家族が、このままカトマンズの病院に入院しているよりも、是非日本に帰国して治療したいと希望したが、酸素吸入をせねばならない状態での飛行機による搬送は極めて危険と、なかなかカトマンズの病院の許可がおりなかった。

粘り強い折衝の結果、ようやくカトマンズの病院の許可を得て、六月初めに医師帯同のチャーター機でその隊員は日本に帰国されたそうだが、残念ながら、それから二週間ほどして逝去されてしまった由である。飛行機の搬送費用は、一〇〇〇万円以上かかったらしい。

隊長であったF氏は、「自分達の体力を過信していました。彼の調子が悪くなった時に、すぐにヘリコプターでカトマンズへ下山させれば良かったのですが、彼が頑張って歩いていたので、ついつい未だ大丈夫と歩き続けたのが最大の失敗だったようです。」と深く反省しておられた。ロブチェ・ウェストを登りに行ったのなら、診療所のあるペリチェ村（四二四〇m）へBCから一日で下山出来た筈である。ペリチェの診療所の医師に診断してもらい、ヘリコプター救助を要請すれば、一時間余で高山病になった隊員をカトマンズへおろせたであろうに。隊長のF氏の悔いは大きかったようだ。

「高所肺水腫や脳浮腫にかかったと思われたら、一刻も早く低所に降ろすことが大切。モタモタしていると翌日に死んでしまうこともあるから、高所肺水腫や脳浮腫は時間との勝負。」と斉藤惇生医師や中島道郎医師から、何度もお教えを受けたことを思い出す。

二〇〇一年に、高野昭吾さんとご一緒に、エベレストの下のカラパタール（五六四五m）までのクンブー山域のトレッキングに行った事があった。その時ご一緒した広島の社会人山岳会の友人が、ディンボチェ（四四一〇m）で突然調子が悪くなった。ディンボチェに着いた翌日、裏山の尾根を高所順応の為五〇〇〇m位までハイキングに出かけたが、彼の歩行速度が突然遅くなりしんどそうであった。途中で下山することにして、午後は休養した。夕食は、彼もけっこう食欲があり、異常な状態は見られなかったが、その夜は隣の部屋から彼の激しい咳が聞こえた。翌朝、彼は食欲もなく、前夜は血痰もでたとの報告であった。ガイドと相談し、ディンボチェの裏にあるペリチェの診療所へ、急遽彼を降ろすことに決断した。

ガイドの指示で、ポーターが交代で彼を背負い、個人装備を背負ってペリチェに降ろした。私と高野さんは、昨日登れなかった尾根の五〇〇〇mあたりまで登った後、ペリチェの診療所へ。私達がペリチェの手前まで降りてきたとき、ヘリコプターがペリチェに着陸し、すぐに離陸していった。

ガイドの報告によると、ペリチェ診療所の医師が診察してくれ、パルスオキシメーターで検査した結果、酸素飽和度が極めて低く、高所肺水腫になっているとの診断だった由。ペリチェの医師は直ちに、カトマンズのヘリコプター出動を要請し、すぐに飛んできたヘリコプターで搬出した由。

ペリチェの診療所から、トレッキング・エージェントのコスモに電話を入れたところ、患者は無事カトマンズの病院に入院し、酸素吸入もして今は全く問題ないとの報告であった。翌々日、トレッキングを続けている私達がロブチェ（四九三〇m）のロッジからエー

ジェントに電話したところ、広島の友人は前日から何もなかったかの如く元気にしており、明日退院予定とのこと。「カトマンズ近辺でのんびり遊んでいるので、阪本さん達は気兼ねなく予定通りトレッキングを続けて欲しい」との伝言を聞き、ホッとした気持ちになった。私達のガイドも、早い決断が彼の命を救ったと、彼も本当に満足そうであった。

そのガイドは、数年前に日本からの公募トレッキング隊を、今回と同じルートで案内したが、参加者の一名が高所肺水腫で死亡してしまった「苦い経験」を語ってくれた。

ナムチェバザール（三四四〇m）からタンボチェ（三八六〇m）に向かう途中、一人の客が極端に歩く速度が遅くなり、呼吸が苦しそうに見えたそうだ。その晩、その客は、もの凄い咳と痰に苦しんでおり、翌朝は全く元気がないようにみえたという。経験豊富なそのガイドは、肺水腫の危険性が高いと判断し、ヘリコプターの救助を要請するからタンボチェから下山するようにと、その客の説得に努めたそうだ。しかし、その客は「折角休暇をとってネパールまで来たのだ。高いトレッキング費用を払ってきたのだから、こんなところで諦める気はない。客の俺が行きたいと言っているのだから、ガイドのお前にとやかく言われる筋合いはない」と怒鳴られる始末。渋々、その客もつれてタンボチェを出発した由。タンボチェを出てすぐ彼の調子が極端に悪くなり、結局すぐ近くのパンボチェ（三九三〇m）のロッジに急遽投宿することになったらしい。その夜、その勝手気ままな客は死亡してしまった。

ロッジのオーナーに、「死人をこのロッジに泊めておくことは困る」と言われ、ロッジ裏にテントを張って、その晩はガイドが一晩同じテントで遺体の番をしたそうである。

カトマンズに遺体を搬送し、日本から飛んできた客の家族と対面した時、「ガイドのあんたがついていながら、なぜ私の主人を死なすようなことをしたのか」と怒鳴られた時には、情けなくて涙が出て本当に悔しかったそうだ。エージェントの社長や、同行のトレッキング客が、死亡した客が好き放題に我が儘に振る舞った結果が招いた事故だと説明してくれて、やっと救われた気持になったと、そのガイドはしみじみと語ってくれた。

二〇〇八年に谷口朗さん、福本昌弘さん達とロールワリン（ネパール）のラムドン・ピーク（五九二五m）に登りに行った。私達が高度順応の為、ツォー・ロルパからロルパ氷河へハイキングに出かけた時、上の方からネパール人のガイドが駆け下りてきた。単独の日本人のガイドをしているが、お客がすぐ上の小屋で動けなくなり、かなり重度の高山病と思われるので、ガイドの属するカトマンズのエージェントに電話してヘリコプター救助を依頼したいとのこと。彼等は、衛星携帯電話を持っておらず、上の小屋にもまた水門管理所にも無線機がないので、もし私達が衛星携帯電話を持っていたら使わせて欲しいと頼んできた。

衛星携帯電話を管理している福本さんが、たまたまナ村のロッジに忘れてきたので、福本さんと私がガイドと一緒にナ村まで急遽降りることにした。ナ村のロッジから、そのガイドはエージェントの事務所に電話を入れて、救助ヘリコプターを要請した。その日の夕方にはヘリコプターはカトマンズからやってこず、翌朝にようやく飛んできて、単独の日本人登山者を運んで行った。助かるかどうか気になったので、念のため、その日本人の名前、住所と電話番号をガイドに聞いておいた。

ラムドン・ピークに登頂して私達が日本に帰国した後、その単独日本人のことが気になったので、彼の自宅に電話をしてみた。奥さんが電話にでてこられ、カトマンズの病院で高所肺水腫と診断され、かなり重症なので一〇日ほど入院されていたそうだ。奥さんと息子さんがカトマンズに行かれ、先日一緒に日本に連れて帰ったばかりとのことであった。

その翌日、本人から電話があり、「衛星携帯電話のお陰で助かりました。ダイアモックスを飲んだ為、高所肺水腫になったと私は判断しています。私は医者ですが、来年カトマンズへ行って、病院でダイアモックスの危険性について指導してくるつもりです。」と独りよがりな持論をまくしたててておられた。ダイアモックスが高山病を惹起するという新説に驚くとともに、本人の高度順応活動の不備を全く認識していないその医者の不勉強に、私は驚き、あきれてしまった。後日、中島道郎医師にその話をしたら、「かかる人間は、相手にしない方が良いでしょうね」とのコメ

ントをいただいた。

今夏、私達はインド・ヒマラヤのラダックに出かけたが、ツォー・モリリ（約四五〇〇m）で女性隊員が夕方から突然不調になり、その晩は嘔吐・咳で一晩寝られなかったようで、自力での歩行が困難だったそうだ。その朝の彼女のSpO_2は、五五であった。同室の女性隊員が翌朝、その状況を詳しく報告してくれ、彼女は非常に危険な状態にあると私は判断した。同行していた副隊長の谷口朗さんからも、「早く降ろした方が安全でしょう」との助言があり、私は直ちに下山する決断をした。

インド・ヒマラヤでは、ヘリコプターでの救助は日本大使館を通じて、インド軍に要請せねばならず、非常に時間がかかるので、私達がチャーターしている車で、朝食後直ちにレーに戻る決断をした。車で、インダス河沿いの村まで降りた段階で、彼女は俄然元気になり、昼食ももりもりと食べ出し、「これで大丈夫」と胸をなでおろした次第である。

翌日レーの病院で診察してくれた女医さんからも、「高所肺水腫に間違いないでしょう。早く彼女をレーに降ろしたのが正解でしたね」とのコメントを戴いた。的確な判断と早い決断により、高所肺水腫による最悪の事態を防げたと思っている。

昨年二〇一二年四月～五月に京都府山岳連盟が、ロールワリン山域（ネパール・ヒマラヤ）のトレッキング・ピークであるパルチャモ（六二七三m）に遠征隊を出した。社会人山岳会所属の合計八名の隊であった。四月二七日、頂上直下約二〇〇mのところで、これ以上登行を続けるのは危険と隊長・副隊長が判断し、下山することにしたらしい。高度障害になったと思われるS隊員が、まともにセルフ・ビレーも出来なくなり、フィックス・ロープへのカラビナのセットやエイト環の使用も出来なくて、隊長や他の隊員がサポートして下降。五七〇〇mのハイキャンプで非常用の酸素をS隊員に吸わせた。高所肺水腫の恐れが強いとY隊長が判断し、出来るだけその日の中にBCまで下山する事に決定。同時にヘリコプターでS氏をカトマンズに搬送すべく、サーダーをターメまで急行させ、ヘリコプターの要請をするよう隊長が指示。ハイキャンプから岩場とルンゼの下降は、難渋を極めたらしい。全く歩行困難なS隊員をロープで確保したり、シェルパに背負わせたりして下降を続けたが、雪が降り出し途中でツェルトをかぶって一時待機したりしながら、何とか午後六時にBCにS氏を降ろすことが出来た。Y隊長以下全隊員とシェルパの必死の救助のお陰で命をとりとめたS氏は、翌朝九時四〇分に救援のヘリコプターに乗り込みカトマンズの病院へ。

カトマンズの病院では高所脳浮腫と判断された由。下山中、S隊員は指の凍傷にかかったらしいが、全隊員とシェルパの必死の協力で命を拾ったのだから、みんなに心から感謝せねばならない筈である。

ところが、帰国後、ヘリコプターの救助費用及びカトマンズの病院の費用を立て替えてくれたエージェントから合計約九五万円の請求書が届いたが、S隊員は全く支払いをせず。各隊員が掛けた保険で求償出来る筈だから、至急エージェントに送金するようにと何度もY隊長が指示しても、S氏は全く支払わず。エージェントに迷惑は掛けられないので、見るにみかねたY隊長個人が立て替えて、九五万円をエージェントに銀行送金されたらしい。

その後、Y隊長やその他の隊員から、自分の命が助かった救助費だからきちんと支払うようにと、電話や文章でS氏に何度督促してもS氏からは、なしのつぶてだったらしい。

パルチャモ遠征隊の反省会を開いても、S氏は全く出席しなかったらしい。

二〇一三年三月二四日に、京都府山岳連盟の海外登山交流会が開催され、私もザンスカール未踏峰探検のスライド・ショーを行い、中島道郎さんも高所医学の講演をされた。

パルチャモ遠征隊の報告になった時、遅れて出席したS氏が突然「私にも話をさせてくれ」とわめきだし、会場は騒然となった。「自分の救助費用も支払わない隊員は、講演する資格がない」と副隊長がS氏の登壇を引き留めるというハプニングがあった。

なぜ、S氏が自分の救助の為に使われた費用の支払いを拒否しているのか、全隊員が全く理解出来ない由である。その後も、引き続き支払いを督促しても、全くその意思のないS氏の態度に、京都府山岳連盟は所属社会人山岳会の会員である某弁護士に依頼して、民事訴訟に踏み切ったそうだ。七月末に、Y隊

長と話をしたが、その時点では未だ判決がでていないとのことであった。

仲間の命を救うために、必死になって動いてくれた友人の善意や好意を平気で裏切って、自分自身の命を救うために使われた費用の支払い拒否する登山者がいることに、驚き、あきれてしまった次第である。どうもS氏は、まともな神経の持ち主ではないようだ。

隊長の的確な判断と迅速な決断、そして他の隊員とシェルパが一丸となっての必死の協力で仲間の命を救った素晴らしい美談に終わる筈であった。しかし、S氏の救助費不払いという、信じられないような不可解な態度で、折角の遠征が極めて不愉快なものとなってしまった。遠征隊の参加者は、全くやるせない情けない気持ちになってしまった模様だ。

高山病も、時には常識では考えられないような、奇妙きてれつなトラブルをもたらすものである。S氏の命を救う為に必死に努力した他の隊員の心情はいかばかりかと、同情の気持ちでいっぱいである。

チリ・スキー旅

安仁屋政武

経緯

二〇一三年八月二〇日から九月二日まで、南米チリ・サンティアゴ近郊でのスキーとイースター島への観光に行ってきた。チリでのスキーはまだ珍しいと思うので紹介する。

私は数年前から東京の山スキークラブ「ラ・ランドネ」に所属し山スキーを楽しんでいる。ここのメンバーはとても活発で、国内での多彩な山スキー行に加え、メンバーの多くがヨーロッパのオートルートやカナダ、アラスカのヘリスキーに行っている。それに刺激されて、私も二〇一二年四月、五人でシャモニーからツェルマットまで行った。

ここ数年、七～八月にチリにスキーに行くことに興味を持ち始めた。以前、二〇〇四年七月下旬に冬のパタゴニア調査の偵察に行った帰り、サンティアゴから車で一・五時間の郊外にあるスキー場に行ったことがある。この時は雪が少なく、ガタガタの貸しスキーだったので、それなりにしか楽しめなかった。

三年前、サンティアゴの空港で見つけたチリのスキー場ガイドブックに全く知らなかった山スキー場が紹介されていた。サンティアゴの北、約一〇八㎞のアンデス山中にある、エル・アルパ(El Arpa)である。スノーキャットで三六〇〇～三七〇〇ｍのピークに行きそこから二七〇〇ｍのベース・ハウス（ＢＨ）まで滑るというものである。コースの七〇％が上級者とエキスパートという地域で、リフトその他の施設は一切ない。宿泊施設が無いので麓のロス・アンデスのホテルから通う。

二〇一二年秋に二〇一三年七～八月に行く計画を考え、北海道勢を中心に声をかけた。この結果、女性一人を含む八人となった。メンバーは最年長が七三歳（指導員）で、六〇代前半と三〇台前半の若者（七三歳の息子）を除き、あとは七〇前後である。いずれも普段から北海道の山で一緒に滑っているので、気心は知れているしお互いの力量も知っている。また、若者を除いていずれもオートルート、安仁屋を除く六人はカナダ、アラスカのヘリスキー経験者でもある。

対象地域は二カ所で、いずれも首都サンティアゴから車で一・五～二・五時間の近郊にある。一つは日本では（チリでも）ほとんど知られていないエル・アルパ、もう一つはファレジョーネス地域（Farellones）である。

ファレジョーネスはサンティアゴの東五〇㎞位のアンデス山中にあり、ここからラ・パルバ、エル・コロラド、ヴァジェ・ネバードの三つの大規模なスキー場まで車で五分～二〇分で行ける便利な所である。それぞれのスキー場の最高点は三四〇〇～三七〇〇ｍで、一つ一つが八方尾根以上、あるいはニセコ全山以上の規模である。

そして、せっかく南米まで行くのだからどこか観光しようとなった。それで一般には行きにくいイースター島に行くことにした。私は一九九四年に行ったことがあるが、ここならまた行ってもいいと思う所である。

日程

八月二〇日（火）：ＡＡ便で成田発。二一日（水）朝、アメリカのＤＦＷ（Dallas-Fort Worth）経由でサンティアゴ着。ダウンタウン地区にある私の定宿に行く。日本を出てか

写真１（2013 年８月 22 日撮影）：エル・アルパのベースハウス。雪崩を避けるため半地下となっている。施設は右がトイレ、左の構造物に小さな机が３つと椅子が数個ある待合室、ガイドの準備室、キッチンがある。標高 2690 m。雪が少ない。

ら三〇時間近く経っているので、午後は時差ぼけ解消も兼ねてのんびりする。私以外は皆、チリは初めて。

八月二二日（木）：朝七時頃にエル・アルパへ行く迎えが来た。ロス・アンデスまでは高速道路を快適に行く。宿のインカ・ホテルには九時頃着き、そこからエル・アルパへ向かう。四千メートル級のアンデスの山並みがうっすらと見える。距離は僅か一五㎞位であるが、道が悪く四輪で一時間半かかった。途中、サボテンの林を抜けて行く。エル・アルパ着一〇時四〇分頃。ＢＨの標高は二六九〇ｍで、予想に反して雪も少なく雪崩対策のため斜面を削って造った貧弱な半地下小屋しかない（写真１）。一〇日前に新雪が三〇㎝積ったそうだが、今は融けてない。

ここにガイド六人とオーナー一人の七人（全員アメリカ人）が常駐している。ビーコン必携で、一パーティ（一〇人ぐらいまで）にガイドが二人つく。スノーキャットは二台ある。このため同時には二～三パーティしか受け入れられないので予約が必要である。二泊三日、一日四回のキャットスキー込みパッケージで一人一三二〇ＵＳドルである（二人部屋）。話を聞いたらここは一九八三年に開設され、当時はＴバーリフトがあり今の半地下小屋の近くにはそれなりのスキーヤー相手の施設があったそうだ。それが一九八〇年代の終わり、あるいは一九九〇年代の始めに大規模な雪崩が起きて全ての施設が吹っ飛んだという。その後、施設の再建はせず、キャットスキーにしたそうだ。

今日のガイドを紹介され、雪の末端に止まっているキャットまでトラックで運んでもらう。意外なことに二人のガイドはスノボである。思いの外暖かい。

地図も無く、プログラムについてなんの説明もなく、幌付き中乗りのキャットに載せられていきなり三六〇〇ｍのピークのてっぺんに連れて行かれる。ここからは雲が懸かっているが一際高くアコンカグアが見えた。高度が高度なので中には頭がボーッとした人も何人かいた。

山のてっぺんでスキーを履き、滑るコースの出だしについてガイドが説明するが、斜面が急に落ちているので全く見えない。「すぐに急斜面となり今は硬くしかも凸凹である。両側には岩が出ているので変な所で転ぶと危険である」、と。先導ガイドが滑った後、指導員の資格を持った人が果敢に滑る。一〇ｍ滑ったら視界から消えたのでその先はどうなっているか全くわからない。自分の番が来て、出だしは下が見えるところまではゆっくりと行く。なんとそこからは斜度三〇～四〇度ぐらいでカリカリ、コブコブの斜面が高度差一〇〇ｍ以上続いている。我々は新雪・深雪を期待して、ファットの軟らかで長めのスキー板を持って来た。こんな斜面は想定外である。下を見て突っ込む一瞬、緊張する。岩に近づかないように回っていく。標高差二〇〇ｍぐらいを一気に滑り降りるとそれなりの傾斜となりコブもなくなって楽しい滑りになるが、ガリガリの斜面で軟らかいスキー板では足に来る。

この日は四回ともここから滑り降りた。最後の二回はこの急斜面の下部をトラバースして尾根を一つ越え、大きな谷を豪快に滑った。標高差四〇〇ｍ位、ガリガリの幅二〇〇ｍ以上の大きな斜面をノンストップで一気に滑る。誰も途中で立止まらない。昼食はボックス・ランチで、中味はサンドイッチ、リンゴ、スニッカーズ、シリアルバー。毎日全く同じで芸がない。三種類のローテーションをすれば毎日違った物になるのに（と考えるのは日本人か）。

四回の滑りを終え五時前にホテルへ向かっ

た。ホテルには六時半頃着きチェックインする。四年前に建てられたそうで、こぎれいで快適なホテルである。夕食は併設のレストランで、ビーフ・ステーキと子羊のステーキをそれぞれ四人前頼み、半分ずつに分けて両方を地元のワインで楽しんだ。

八月二三日（金）：八時にホテルを出る。九時半着。別なグループ（アメリカ人、四人のテレマーカー）の到着を待ち、一〇半頃にキャットに乗る。最初の三六〇〇mピークからのランで一人が転倒し、一〇〇mぐらい流されたが、幸い無傷であった。今日は二回目に三七〇〇mの別のピークに行き、余り滑っていない斜面を快適に楽しんだ。最後の滑りは黒ダイア二つのエキスパートの斜面であったが、斜面が滑らかだったので快適であった（写真2）。二時半頃終了し、三時過ぎに発つ。ホテルには四時半頃着き、七時頃までしばし休養する。

今日の夕食は町に出てサーモンを注文したが、焼き方が酷く皆半分以上残した。極めつけはワインで、三本の内、一本は酢になりかけていた。

写真2（2013年8月24日撮影）：エル・アルパのエキスパートコース（上部）。ピークは3520 m。向かって右の肩から滑り込む。新雪が積もった24日は標高差600 m位をノンストップで一気に降りた。全山真っ白だったらどこでも滑れ、素晴らしいだろう（雪崩に注意）。しかし、よほど運が良くないとそのようなコンディションに恵まれないだろう。

八月二四日（土）：八時頃ホテル発。濃い霧で今日は山が見えない。上は雪が降っているのではないかと期待する。標高一三五〇m位で雲の上に出る。現地着九時一五分頃。今日は寒い。上部にはうっすらと雪が積もっているので少しは期待できる。またアメリカ人のグループを待つことを強いられ、キャットに乗ったのは一一時半近かった。この七人のアメリカ人グループは喧しく沈黙が一〇秒と続かなかった。三三〇〇mを越えると新雪が五～一〇cm積もっていて、ガリガリの斜面は消えていた。昨日滑った大斜面も新雪で快適であった。

午後太陽が出て急に暖かくなった。最後のランは今までで一番急で両脇岩壁の狭いルンゼを滑ったが、この時に限ってガスが出て視界が二〇m以下のホワイトアウトになった。ガイドの一人が先行し、もう一人はトラバースからルンゼに突っ込む入口に立って指示をした。下が全く見えなくて両側が岩壁の幅二〇～三〇mの急なルンゼに突っ込むのはガッツがいる。斜面は全く分からず、岩が目の前に迫りターンする。下で先行したガイドが声を出しているのが唯一の頼りで、声を目がけて滑る。ルンゼに突っ込む場所を間違った人もいたそうだ。ここから尾根を一つ越えて新雪が薄く積もった別の谷を快適に滑る。

BHを四時頃発ち、インカ・ホテルで荷物をピックアップしてサンティアゴのホテルに六時半頃到着。夕食は中央市場の裏にある海鮮レストランに行き、最初の打ち上げを行った。

八月二五日（日）：迎えのミニバスが八時半頃来る。道路状況はまあまあで、ファレジョーネスにあるアンデス山岳会のヒュッテ〝ガストン・サーベドラ〟に九時四〇分頃到着。四人の蚕棚ベッドがある狭い部屋二つとリビング・ルーム、ダイニング・キッチン等自炊設備の完備した貸し切りである。自炊は大変なので、一泊二食付き一万円弱で賄ってもらった。この宿はチリからの元留学生の手配で借りられた。ここからすぐの所に三つの大きなスキー場があるが、今日はラ・パルバに行くことにする。

ラ・パルバにはありがたいことに六九歳以上のスーパー・シニアというリフト券が約一九〇〇円であり、うるさいチェック無しに三〇代の若者を除いて皆これで購入できた。因みに普通の券は約七八〇〇円である。チリのスキーはまだ富裕層に限られているので、

写真３（2013 年８月 26 日撮影）：ヴァジェ・ネバードの最奥から見たセロ・プローモ（5425 m、上部は雲が懸かっている）。左隣りはセロ・ラ・パルバ（4047 m）。どこでも滑れる。

ゲレンデはがらがらである。雪はそこそこあったが、キャットで踏んでいる所以外は石や岩が至る所に出ていた。午後からガスがでて、粉雪が時々舞う。このまま降れば明日は新雪だ。四時に上がる。宿に着く頃に本格的な雪となり、しばし降る。明日が少し期待できる。

八月二六日（月）：最大規模のヴァジェ・ネバードへ行く。九時過ぎ出発。朝冷え込んだので、道路はかなり凍っている。送り迎えするドライバーはチェインを持っており、立ち往生している沢山の車を尻目に快適に行く。

写真４（2013 年８月 26 日撮影）：セロ・ラ・パルバ（4047 m）頂上からの３人のエクストリームスキーのシュプール。この急で狭いルンゼを直滑降に近い滑りで降りた。雪崩が発生している。２人はスノボだった。

九時四五分頃到着。真っ青な空でアンデスの山並みが綺麗だ。ここは、日本のツアー会社が日本から客を連れてきているスキー場だ。一番高いところは標高三七〇〇ｍもある。シニアのチケットは約二六〇〇円、大人は約八二〇〇円と若干高い。どこもそうだが、リフトの半分以上はＴバーでしかも長さが一㎞以上、斜度が二〇度を超すのも珍しくない。新雪が一〇㎝ぐらい積もっており、そこそこの新雪滑りを楽しむ。ここから見るセロ・プローモ（Co Plomo、五四二五ｍ）が見事である(写真3)。私は二〇〇六年の三月に登った。ここでは山スキーのシュプールが至る所に見られ（写真４）、コースを知っていれば素晴らしい山スキーが楽しめるだろう。

八月二七日（火）：三つ目のスキー場、エル・コロラドに来た。リフト・チケット・システムが他二つとは全く異なり、購入にしばし時間を食う。ここではＩＣカードを約千円で購入して、それからリフト代を別に払う（シニア、約二一〇〇円、普通約六二〇〇円）。日本のようにＩＣカードを戻せば金が戻ってくるのとは違う。カードは何回でも使える。

もたもたしていたら、日本人が話しかけてきた。サンティアゴ在住の人で、アンデススキー同好会の会長だという。奥さんと他にチリ人と結婚している三〇代の日本女性が一緒である。案内してくれるというので、昼まで一緒に滑った。彼らは踏んであるところ、我々は踏んでいないところを狙って滑る対照が面白かった。途中、彼らの知り合いのもう一人の日本人と会った。冬のニセコでスキーガイドをしているという。快晴で朝の斜面はカリカリに凍っていたが、昼過ぎには緩んで滑りやすくなった。

ゆっくりとした昼食の後、一回滑り引き上げた。三時半頃ホテルを出たが、途中渋滞でサンティアゴの宿に着いたのが五時半頃であった。明日からのイースター島観光のため、皆ペソが必要だという。六時閉店ぎりぎりに間に合って換金した。夕食は三〇〇ｇのステーキで二回目の打ち上げ。

八月二八日（水）：イースター島に行くべく

空港へ着いたとたん、一人がパスポート、金その他重要書類を入れたポーチをホテルに置いてきたと言う。一瞬、皆頭が真っ白になる。便の出発時間まで余裕があったので、私が同行してホテルに取りに行った。空港には出発の三〇分前には戻ってきたが、カウンターはすでに締め切られていた。係を捕まえて乗せてくれと交渉したが、頑としてダメだった(後からメンバーに聞いたら、便はスタンバイを載せて満席だったそうだ。我々にそのように説明すれば納得したのに)。我々二人を待っていた者を含めて計三人が乗り損なった。が、運良く、次の日のチケットが無料でとれた。結果的に、この日ゆっくりできて休養となった。

八月二九日(木)：八時一五分発のイースター島行きに乗る。がらがらだ。現地には一二時過ぎに到着(サンティアゴ時間、一四時)。昨日着いた五人の仲間が八人乗りのミニバンレンタカーで迎えに来ていた。私の運転で一通り島を一周する。私は一九九四年に一人で来たことがある。基本的には二〇年前と変わっていないが、舗装道路が増えたのと、モアイのところが整備されていたのが目についた。ここでの食べ物はCevice de Atunというマグロの酢漬けである。チリでもここでしか食べられない。疲れが出たのか、体調の不良を訴える人が出た。

八月三〇日(金)：午前中土砂降りの雨で出発便が遅れ、五時半頃の出発となる。サンティアゴ到着時間が四時間ぐらい遅れて真夜中になるので、空港からホテルまで送ってもらうミニバンの予約を変更しなければならない。幸い、メンバーの一人が日本からもって来た国際通話もできる携帯が通じた。サンティアゴには二三時半頃着陸。ミニバンのドライバーは出口で待っていて、ホテルには夜中の一二時半近くに着いた。

八月三一日(土)：アメリカ(DFW)への出発が夜の九時頃なので、ゆっくり起きて土産のショッピングと市内観光を行った。ホテルの周辺はサクラ(避寒サクラ)が満開である。気がつくと町の公園にも結構サクラがある。ダウンタウンの端にある展望の良いセロ・サンタ・ルシーアという丘に行ったが、冬のサンティアゴ名物のスモッグでアンデスはかすんでいた。

最後の打ち上げとなる遅い昼食は、中央市場のドンデ・アウグスト(Donde August)に海鮮を食べに行った。ここは世界中からの観光客が来る超有名なレストランで、夏には日本人の団体も大挙して押し寄せる。我々が日本人と分かると、ウニ、カニ、アワビ、その他日本語を使って高い料理とワインを勧める。が、私はいつも来ているので、適当に見繕って高くないのを注文した。

九月一日(日)：DFWに朝の六時前到着。乗り継ぎ便の出発(一〇時過ぎ)までの時間つぶしにメキシコのコロナビールを飲むべくレストランに入ったら、今日は日曜なので一〇時まではアルコール飲料の販売は禁止されているとのこと。タコスとエンチリャーダで時間を潰す。

九月二日(月)：成田着一三時半頃。全員無事に帰国。面白かった旅は終わった。一部の人は北海道便へ乗り継ぎ、帰道した。

ツェラムよりダーランへ帰りのキャラバン
―高木真一と歩いた一五日間の旅―

斎藤惇生

五月二三日、上田はヤルン氷河を歩き通して、無事ツェラムに帰着した。一日も早く日本へ送り帰さねばならない。毎日ガーゼ交換の時診たが、幸い感染の徴候はなかった。

予定の二七日、二八日天候が悪くヘリコプターは来なかった。二九日朝ガスで視界がそれほどよくないので多分来ないと思っていたら、八時半突然ヘリがやって来た。オーストラリア人の白人の飛行士は、にこりともせず天候が悪化しそうだから早く乗るようにとせかす。慌てて荷造りして上田、樋口、田附が乗りこむ。舞上がったヘリはシンバコーラーの谷間を下り出した。故障墜落かと一瞬肝を冷やしたが、すぐ高度を上げて飛んで行った。

三〇日、上田の治療の助手に残した高木と私は、コック助手のダヌー、ローカルシェル

パ二人、ポータ四人と残った荷をすべてまとめてツェラムを後にした。ダヌーは料理もできき、態度がしっかりしていたので安心だった。ダーランまで一五日間の長い旅だったが、甲斐が帰りのキャラバンのことは、ほとんど記憶がないと書いているが、私も同様に乏しい。恐らく気疲れと緩みからだろうと思うが、簡単な記録も残していない。しかし宿泊地の記録は報告書の日誌にきちんと記載されている。これは高木が書きとめておいたものだと思う。何もないとなると高木に対し申しわけないので思い出したことを少し書いてみたい。

三〇日はニルギン・ラを越してシュレレ・カルカ泊りだった。午後私は一人のポーターが担いでいた私のシュラーフがないのに気付いた。ダヌーに言うと彼はすぐ担いでいたポーターを激しく責めはじめた。腰に手をあてて威嚇しているが手は出さない。最後そのポーターの隊荷を取りあげて追い出してしまった。シュラーフは多分途中の樹の茂みに隠しているだろうとダヌーは言う。この間他のポーターたちは全く知らぬ顔で口出しもしなかった。あいつがやったんだと知っていたのだろう。このあと私はシュラーフカバーだけで寝たのだが、高度も下り暑くなるので十分寝めた。

翌三一日はグンサ泊、グンサへ下りる最後の尾根道は黄、ピンク、白色などの色とりどりの石楠花が華やかに咲き乱れていた。釈迦の説いた極楽浄土への道は、きっとこの様だったのだろうと思った。グンサはカンチェンジュンガ氷河に入る最後の部落で、チベット系のカンパが住んでいる。家は二階建の木造でおおきい。後年入った雲南のカンパの家もよく似ていた。

テントを張るころから子供たちがおおぜい集まって来てにぎやかになった。そのうち大人も来て薬をせがまれるだろうと、テントに入り小分けした薬品箱を出しておいた。高木を呼びにテントから出た。戻ってみると薬箱が見当たらない。あまりにも素早い早業に驚いた。その夜は荷物の横にシェルパが一人寝ずの番をしていた。このようだったので翌朝シェルパにせかされて、さっさと出発。部落のなかを歩いて観察することはしなかった。

グンサからカンチェンジュンガ氷河の下流になるチャル・チュー（グンサコーラ）に沿った道を南下する。ヘロックでタムール河と合流する。ヘロックだったと思うが寒さには強いが暑さに弱いチベットポーターは、リンブーのポーターに替った。小さな隊で河原とか岩小屋に泊ったので、薬をねだりに来る村人もなく、この面では高木も私ものんびりできた。

高木は趣味の小さいシジミ蝶を、捕虫網をふって捕っていた。シジミ蝶には新種が見られると言っていた。隊員の誰かがその頃発見されて騒がれていたアポロ蝶を、何匹か捕ったと聞いた。後はどうなったか知らない。

途中小さな谷の出合で休憩した時、大豆大のガーネットを見つけた。二人で一時間ほど探して五〇個ほど拾った。大事に持って帰ったが、小さな原石では値打ないと聞いてがっかりだった。

高木は山岳部のリーダーでヒマラヤ初見参だった。最後まで最前線で頑張り、五月一六日には第二次救援隊として富田と一緒に八一四〇mのデポ地に到達した。しかし最も緊張し辛かったのは五月一三日のCⅣからCⅤ予定地の荷上げの時だったと言っていた。途中で上方に行くのを拒否しそうになったカルマ以下のシェルパに対し、若い高木が断固として譲らず説得し辛うじて荷上げを成功させた。この荷上げが不成功だったら登頂隊は出発できていなかった。前にも書いたが高木は疲れはてて、数歩歩いては立止って休んでいた。高木がK12峰登頂成功後帰路に遭難死したことは惜しまれてならない。

南に下るにつれタムール河は大河となり河原は広くなった。高度も下り日中は四〇℃になる暑さであった。ポーターたちは三〇kg近い荷物を担ぎ、もくもくと文句一つ言わず歩く。グルカ兵帰りが一人いた。世界最強のグルカ兵の一端を見たような気がした。

どこか忘れたが雨のなかテントを張った。雉打ちに外に出た。草叢の羊歯を見ると葉の上に蛭が何匹もうごめいている。羊歯を足で押し倒してしゃがみ、なんとか用をたした。無事蛭に吸いつかれなかったが、かなり勇気のいることだった。

六月一三日やっと先に到着したみなに迎えられてダーランについた。出発の時泊ったタカリ族の兄弟が経営する小さいが清潔で気持ちの良いダーランホテルに泊る。丁度こぶしより少し大きいインドマンゴーの盛りだっ

た。この世にこんな美味い果物があるかと思うほど美味かった。翌日ビラトナガールに移動したが、この間みな多分一〇個くらいは食べたのでないか。六月一六日には全員カトマンズに帰着した。

各隊員はその後、ネパール、インド、セイロンなどで調査、高木と松沢はパキスタンに入国、フンザよりパス氷河、シスパール峰を調査偵察した。

八月一一日、京都教育文化センターでＡＡＣＫ主催の松田隆雄の告別式が行なわれた。

第二五回雲南懇話会（二〇一三年六月二二日開催）に於ける講演概要等

前田栄三、安仁屋政武

第二五回雲南懇話会は、二〇一三年六月、東京市ヶ谷のＪＩＣＡ研究所国際会議場で開催され、一一二名の参加をいただき、盛会でした。以下、概要を紹介致します。

①「ヒマラヤの自然の聖地、その二」―ブータンの八百万の神々―　写真家、ＡＡＣＫ　小林尚礼

ブータンには、自然信仰の聖地が多い。岩壁や洞窟のほか、湖や岩、山、大木などの聖地が散りばめられている。そこには八百万の神が宿る。山岳民族が暮らすブータン東部には山の聖地が多く、鬼神の宿る山、仏や聖人ゆかりの山など、その山容によって宿る主は様々だ。また、三年に一度降臨する土地神へ祈る祭りなども伝わる。それらを写真で紹介しながら、人々は自然と対峙して何を祈るのか、その根底には何があるのか考えてみたい…として概説した。

鮮やかな色彩に彩られた作品（写真）が素晴らしい。

②「サバイバル登山、その思想と実践」―自給自足登山のさきに見えるもの―　サバイバル登山家、岳人編集部　服部　文祥

自給自足の登山といえる「サバイバル登山」を試みるに至った過程、具体的な事例紹介、その結果、なにを感じ、登山や現代社会をどのように評価するようになったのか…について、概説した。

彼がやっていることは、まさに明治・大正・昭和の時代…旧き時代の登山で、別段新しいことではない。小屋がけ、たき火、釣り、獣うち…、明治の案内人のほとんどは猟師だったので、このようなことは当たり前だったろう。

今の時代に実践している演者の存在そのものが、野生の証し。強靭な生命力を感じさせられた。鹿の脳味噌を、それと知らずにおねだりする末娘の姿が印象的だった。

③「立山・剱岳の多年性雪渓と氷河」―これまでの日本の雪渓研究史と今後の展望―　富山県立山カルデラ砂防博物館、ＡＡＣＫ　飯田　肇

飛騨山脈、剱岳にある小窓雪渓および三ノ窓雪渓で、日本最大級の長大な氷体の存在を確認。その後の流動観測の結果、小窓、三ノ窓両雪渓は、日本では未報告であった一年を通じて連続して流動する、現存する「氷河」であると考えられる。立山東面の御前沢雪渓も、現存する「氷河」の可能性がある…として概説した。（詳細は「雪氷」七三巻三号、p213～を参照）

立山連峰の他の万年雪（内蔵助雪渓等）についても、引き続き調査していく…としている。

③「史料に見るタイ文化圏の樹木利用」―絹、茶、酒やビンロウなど―　東京外国語大学教授　アジア・アフリカ言語文化研究所　Ｃ・ダニエルス

タイ文化圏は、雲南を含む東南アジア大陸部に広がる山間盆地一帯に位置するが、盆地のタイ系民族以外に、山住みのモン・クメール系、チベット・ビルマ系、カレン系、ミャオ・ヤオ系諸語を話す民族も暮らしている。一三世紀から二〇世紀まで、当該地域がタイ系民族の言語と文化によってゆるやかに統合されていた歴史事実にちなみ、「タイ文化圏」と命名された。

タイ文化圏の物質文化は時代と共に変わってきたが、それがどのような要因によって変化したのか等については、研究がほとんどない。本発表では歴史史料に明確に読みとれる樹木とそれを加工してできるモノを取り上げて、物質文化の歴史を考えてみたい…として

概説した。

日頃、勉強・調査研究することの難しい「時代&地域」の貴重な研究成果である。

④「雲南省南部から北タイにおけるメコン川流域の環境保全と開発―メコンオオナマズをめぐる生態史―」　総合地球環境学研究所名誉教授　秋道智彌

メコン川流域では一九九〇年代以降、中国の経済発展に関連した開発が進められてきた。一方、一九九八年の長江下流域における大洪水への反省から、中国政府は「退耕還林」政策を打ち出した。天然林の伐採と狩猟の禁止を訴えた国策は環境保全を前面に打ち出すものであった。国内的には国家級保護区を制定するなどの動きがある一方、周辺のとくに東南アジア方面やインド洋への経済進出を画策する開発計画が進められてきた。こうした急激な経済開発のなかで、メコン川の固有種であるメコンオオナマズをめぐる保全問題が急浮上した。ここではメコンオオナマズを事例として近年のメコン川集水域における開発と環境保全の問題を概説された。タイ王国チュンコーン水域では、近年、オオナマズの漁獲はゼロとなっている。その様子が、捕獲頭数の経年変化として図示された。メコン川から眼が離せませんね！

なお、第二六回雲南懇話会は、金子民雄講演会として二〇一三年一〇月〇一日に開催されました。

AACKニュース

松沢哲郎会員が「文化功労者」に

二〇一三年一一月五日に松沢哲郎会員が文化功労者に顕彰されました。チンパンジーの暮らしと心の世界を明らかにし、人間の認識と行動の進化的起源について数多くの知見を生み出すことにより、「比較認知科学」と呼ばれる研究領域を開拓しその発展に多大な貢献をしたことが顕彰の理由です。

理由の詳細は京都大学霊長類研究所ＨＰによれば以下の通りです。

比較認知科学の分野において、ヒトと最も近縁なチンパンジーを対象に、アフリカの生息域での研究と日本の実験室での研究を癒合させた独自の手法で「進化の隣人」と呼べるチンパンジーの暮らしと心の世界を明らかにし、人間の認識と行動の進化的起源について数多くの知見を生み出すことにより、「比較認知科学」と呼ばれる研究領域を開拓しその発展に多大な貢献をした。氏の研究は、「チンパンジーの心の研究」を基盤に、人間の認識と行動の進化的基盤を明らかにしたものといえ、氏が開拓した「比較認知科学」は、いわば心理学と霊長類学から生まれた、認識の進化を扱う独創的な研究領域である。氏はチンパンジーの認識と行動を、アフリカの自然場面での観察研究と、「アイ・プロジェクト」と呼ばれる日本の実験室場面での実験研究を融合させた新しい視点から総合的に研究し、日本の実験室での研究では、チンパンジーの視知覚・認知・記憶などの機能がヒトと比肩しうるものであることを実証した。その一方で、いくつかの情報処理過程において、ヒトとチンパンジーの相違も見出し、それがそれぞれの種の生態学的環境と深く関わっていることを指摘した。アフリカの自然の生息地での研究では、野生のチンパンジーの生態、特に道具使用とその習得過程に焦点を当てて、チンパンジーにも教育や文化と呼べるものがあることを明らかにした。氏はさらに、こうした観察と実験の手法を融合させて、特に親子を含めたチンパンジーのコミュニティー全体をシミュレーションする飼育下の研究を行い、世代間で知識や技術が文化的に伝播する様相を克明に描き出し、親子の絆や社会的な場面での学習の重要性を明確に示した。以上のように、氏はチンパンジーというユニークな素材を対象とすることにより、人間の認識や行動の進化的な起源を解明、人間の本性について新たな理解をもたらし、その功績は誠に顕著である。

飯田　肇会員に秩父宮記念山岳賞

飯田　肇会員は、二〇一三年一二月七日、「立山連峰に於ける越年性雪渓研究及び日本初の現存氷河の発見」により、第一五回秩父宮記念山岳賞を、福井幸太郎氏との連名で受賞されました。アイスレーダー観測やＧＰＳによる流動観測の結果、剱・立山山域の小窓、三ノ窓、御前沢の三つの雪渓が現存する「氷河」と考えられることを明らかにしたことが

評価されたものです。なお、飯田会員は、第一〇回（二〇〇八年）の「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」（川田邦夫会員、横山宏太郎会員と連名）に次ぐ二度目の受賞です。

会員動向

会員異動

訂正

前号（No.65・66）の記事で左記の訂正をいたします。

2頁
上段後ろから2行目　一九七四年→一九六四年
上段後ろから1行目　一九七二年→一九六二年
中段1行目　ヌプチェ→ヌプチュー
中段2行目　一九七三年→一九六三年

6頁
上段後ろから7行目
二六日→一六日
CⅣ→CⅢ
下段8行目
P_2はより鋭高→松田はP_2はより鋭高

編集後記

このたび、前田　司さんから編集の仕事を引き継ぎました。前田さんには五年以上の長きにわたる編集担当、ほんとうにお疲れ様でした。前号の編集後記で若い（?）とカッコ付きで紹介されましたが、すでに六六歳です。三〇～四〇年前の若い頃にはＡＡＣＫを大いに利用させていただいたので、多少のご恩返しになるかとお引き受けしました。しばらくおつきあいください。

前号はヤルン・カン四〇周年特集でしたが、今号は多彩な内容です。ラダックのトレッキング（阪本さん）と、チリのスキー旅（安仁屋さん）の原稿では、先輩方のますますお元気な様子がうかがえます。なお、ラダックの記事は、ＡＡＣＫホームページにもほぼ同じ内容が掲載されており、数多くの写真がカラーで添えられていますので、ご覧いただくとよいでしょう。

高所肺水腫・脳浮腫(阪本さん)については、実例をもとにした貴重な教訓と思います。ヤルン・カン特集の続きとして、斎藤惇生さんに帰路キャラバンを書いていただきました。

これら貴重な原稿をいただきながら、不慣れなため、発行が遅れてしまいました。早く原稿をいただいた方をはじめ、ご迷惑をおかけした皆様方にお詫び申し上げます。

次号も特集は組んでいません。皆様からのご寄稿をお待ちしております。また、原稿のお願いをしていくつもりですので、よろしくお願いいたします。特集などについてはこれから考えていきますので、ご意見をお寄せください。

私は定年後も非常勤としてもとの職場に出ていましたが、それも三月末で終わりになりました。しかし事務局への連絡を怠っていたため、新しい名簿でも、旧職場と、そのメールアドレスが記載されています。正しくは、この号の会員動向欄にもあるように、メールアドレスは自宅のものになりました。原稿をお送りいただくときは、ご注意ください。

横山宏太郎

発行日　二〇一三年十二月末日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松林公蔵
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町(総合研究二号館四階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所